

いじめ克服を呼び掛ける「心の宅急便」という朗読活動で、県のボランティア活動奨励賞を受賞したヒロコ・ムトーさん(66)＝横浜市港北区在住＝が、半生をつづった著書「一度しかない人生だから」(海竜社)を出版した。いじめに苦しんだ2人の娘、

壮絶な闘病の末に先立った夫、70歳すぎから絵画や人形展を成功させた母。家族や友人にぶつかり、支えられながら「自分のあり方」を模索してきた経験を通し、「一歩踏み出せば、思ってもない人生が開ける」と話す。(佐藤 将人)

# 自分らしさを探して

## いじめ苦しんだ娘、闘病続けた夫…

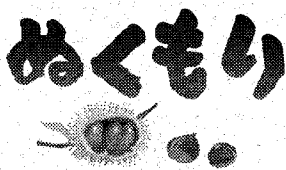
### 「心の宅急便」ムトーさん 半生つづり著書

60代からの時間を「人生の午後」「おまげの人生」と表す。子育てが一通り終わり、人や仕事への執着が薄れ、身軽になっていく段階だからこそ面白いことが起きる、いや起こせるはずだと。単純な楽観論にも聞こえるその言葉が、読了すれば作者がつづる過去が語らせたものだと分かる。

女性の30代後半を「人生で一番迷う時期」と言う。「誰々の妻、誰々の母と言われるうち、自分が誰なのか分からなくなる」。自身がそうだった。2人の娘がいじめに遭った。親族に不幸が続いた。うっ屈した思いが夫への離婚通告という形になった。10年以上を、仮面夫婦で過ごした。夫が50代半はでがんになった。「私が精神的に追い込んだせいだ」。ガツンと殴られた気がした。「固く閉じた心が木っ端みじんに

気をもらった。夫と、互いを心から思い合えた。命の火を燃え尽くすように晩年を生きた母、家族と友人を大事にし、病と勇敢に闘った夫。2人は大きな「宿題」を残した。自分を知り、「らしく」あり続けること。63歳にして娘の経験などを通じ、学校などでいじめ克服を訴える講演「心の宅急便」を始めたのは、一つの答えだった。

「人は変えられる。60代以上だけでなく30、40代の人にも読んでほしい」。諦めたり、悲観したり、迷ったり。一歩が出ない人に伝えたい。「今日はあなたの残りの人生の、最初の日」



自著「一度しかない人生だから」を手にするヒロコ・ムトーさん 横浜市港北区の自宅